

か
す
み
ざ
わ
だ
け

霞沢岳 狂炎の花びら

◆長篇山岳ミステリー

梓林太郎

Rintaroh Azusa



kosaido blue books

霞沢岳 狂炎の花びら

KOSAIDO BLUE BOOKS

著 者 梓 林太郎

発行者 櫻井道弘

発行所 廣濟堂出版

〒107 東京都港区赤坂6-17-5

電話 03(3584)7610(営業)

03(3584)6123(編集)

振替 00180-0-164137

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

〈編集担当〉大西 修

©1996 梓 林太郎

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05689-9 C0293

霞沢岳 狂炎の花びら

梓 林太郎

目 次

一章 秋 桜	7
二章 恨む女	37
三章 山の湯宿	72
四章 声と影	104
五章 海と山と死	140
六章 疲 労	170
七章 狂炎の花びら	193

一章 秋 桜

1

長野県警豊科署とよしなの捜査は行きづまっていた。

きょうも捜査会議があつた。

それが終わったあと、道原伝吉みちはらでんきちと伏見日出男ふしみひでおは、自分たちの席の机に肘を突いて、事件と捜査を振り返っていたときだった。

旭川東署あさひかわひがしからです」

刑事課では最年少の宮坂みやさかが電話を受けて、道原のほうを向いた。

用件をきいてから取り次げばよいのにと、道原

は思ったが、受話器を受け取った。

「道原と申します」

「北海道警旭川東署刑事課の山口やまぐちと申します」

そういった相手は、道原と同じ四十代らしかった。山口の背後には複数の人声や電話のベルの音が入っていた。

「まだ夕刊には載っていないと思いますが、けさ、旭岳の近くで、男の登山者が遺体で発見されました」

山口はいった。

大雪山系旭岳だいせつといったら、北海道では最高峰だ。毎年秋になると、かならずというくらい紅葉と初雪の便りが新聞に載る。北アルプス・穂高ほたかの涸沢からさわの紅葉の写真が新聞に出るころ、大雪からは冠雪のニュースが届く。今年は平年より十日ばかり早く、たしか九月十三、四日ごろ、赤や黄に彩られ

た山肌に、稜線付近が白く染まった写真が大きく載っていた。

登山者が死んだ。遭難事故はそう珍しいことではない。それをいちいち、他県の警察へ連絡してくる例はないのだ。

山岳遭難なら、大雪山よりも北アルプスのほうが、その件数ははるかに多いのではないか。入山者の数が比較にならないからだ。

「その遺体は、これから、旭川市内の大学病院で解剖しますが、私たちが見たところ、最近、そちらの管内で発生した殺人事件の被害者が受けていた損傷と、似たところがあると思ったものですから、電話を差しあげた次第です」

山口という刑事は、おっとりした口調でそういった。

「こちらの事件とおっしゃいますと、九月十一日

に山岳地で発見された、男の登山者のことですね？」

道原は念のためにきいた。

「霞沢岳^{かすまわ}という山で殺されていたという男の事件です」

山口は、その事件を新聞で読んで記憶しており、きょう、あらためてその事件を報じた新聞を読み直したという。

霞沢岳で発生したのは、こういう事件である。

——九月十一日の午後、徳本峠^{とくほんとうげ}小屋を通じて登山者から豊科署に電話が入った。

徳本峠側から霞沢岳へ三十分ほどのハイマツ帯に、登山装備をした男が倒れているのを、三人パーティーが発見した。恐る恐る近寄って声を掛けただ。が、男は返事をするどころか、微動だにしない。三人は、倒れている男の顔を見て、悲鳴

に近い声をあげた。顔を十文字に切ったように血を流していたからである。

パーティーは、初めて挑戦する霞沢岳へ登頂するところではなくなり、やってきたコースを引き返した。往きが約三時間半、帰りが約三時間十分の道程である。

昨夜泊まった徳本峠小屋へ飛び込み、遭難者発見を伝えた。

通報を受けた豊科署は、翌朝の出動に備えた。何年か前までは、霞沢岳へ登る人はめったになかった。登山コースがなかったのだ。

北アルプス南部の古い地図を見ても、この山への登山コースは入っていない。

登る人は、訓練を積んだ熟達者にかぎられていて、上高地から八右衛門沢をツメたのだった。その沢は途中、滝のようになり、暗い森林の中にあ

るため緑の苔がついて、滑りやすい。急勾配のため、落石の危険もある。

こうしたことから、穂高や槍へ登る一般登山者は寄りつかないし、何年か前までは、穂高へ何度も登っていないながら、霞沢岳の存在すら知らない人も珍しくなかった。

上高地の梓川右岸から、あるいは岳沢などから眺めると、深く八右衛門沢が切れ込み、中腹でその沢がY字に岐れている。Y字の中央の尖った岩峰群が霞沢岳で、標高は二六四五・六メートル。岩肌に雪が貼りつくと、身震いを起こしそうな厳しい威容になる秀麗な山である。

署で登山パーティーからの通報を受けた山岳救助隊の小室主任は、遭難者は登山のベテランだろうと判断した。めったに人の入らない山へ、単独で登ったようだからだ。

しかし、顔を十文字に切ったように血を流していたときいた彼は、課長に通報内容を報告したあと、刑事にも伝えた。

小室の話をきいた道原は、山歩きの達者な伏見と牛山刑事を、次の朝、救助隊と一緒に現場へ登らせることにした。

翌日、上高地から六時間かけて現場に着いた一行は、遺体となった男の登山者を見たとき、一歩退いた。

発見パーティーがいったとおり、男の顔は十文字に切られたようになり、すでに変色した血で、まるで黒い十字架を貼りつけられたようになっていた。

たとえば、転倒した拍子に顔を岩角にぶつけて出血したといったものではなかった。遺体の顔に目を近づけた牛山は、「刃物で切られたんだ」と

いった。

死者は、両手に手袋をはめていたが、なにも持っていないかった。彼の物と思われるザックはすぐ近くで仰向くように転がっていた。付近を這い回ってさがしたが、刃物は見当たらなかった。

何者かに顔を十文字に切られただけで、絶命したとは思われなかった。外見では不明だが、他に外傷ありとみた一行は、「他殺の疑い濃厚」の連絡を本署に入れた。

遺体を徳本峠近くまで運び、ヘリコプターの出動を要請して、いったん上高地に下ろして、検視したあと、松本市にある信州大学法医学教室解剖室へ搬送した。

遺体は、ピッケルと思われる物によって、腹と腰を何カ所も殴打されていた。それによって倒れたあと、ナイフ様の凶器で、額から顎へ縦に、そ

して目の下を横一文字に切られたもの。死亡は九月十日午前十時から正午ころの間と断定した。

自らこんな死に方をするわけがない。いや、腹や腰を死ぬほど殴打することは不可能だ。それと遺体の近くに凶器がない。他殺以外には考えられず、豊科署は、県警本部と協議して、同署に捜査本部を設置した。

遺体の男は、四十半ば。身元の分かる物は持っていないかった。たぶん、シャツかジャケットに名札や名刺類を入れていたのだろうが、すぐに身元が割れるのを警戒した加害者が、抜き取ったものと判断した。

霞沢岳へ登るルートはごくかぎられている。前述したように、上高地から暗い沢をツメるか、徳本峠方面から入るしかない。

それで死亡した男は、前日、徳本峠小屋に宿泊

して、早朝出発したのではないかと推測した。上高地から沢をツメたのだとしたら、ヘルメットをかぶり、滝水に打たれる場合の用意に、雨衣をザックの上のほうに入れていそうだった。が、この死者は、ダウンジャケットをザックに収めてはいたが、雨衣は携行していなかった。

刑事は、死者の写真を徳本峠小屋の主人に見てもらった。主人は、臭い物を嗅いだような顔をしたが、九日に単独で泊まり、十日早朝出発した男の客は二人しかいなかったと答えた。

二人の身元は宿泊カードで確認できた。一人は三十六歳、一人は四十四歳で、ともに住所は東京となっていた。

死亡した男は四十代半ばだった。四十四歳の男は宿泊カードに登山地を「霞沢岳」と記入していた。

この男に違いないということになった。

友部直紀ともべ なおきといって、職業は会社員となっていた。

豊科署の問い合わせに妻が応じ、

「主人は、山へ登っていて、きょう中に帰ってくることになっています」

と答えた。

係員は、死亡していた男の特徴を説明した。

電話をきいていた友部の妻は、半狂乱になったような声を出した。夫に間違いないと思ったようだ。

家族と勤務先の同僚がやってきて、遺体と対面した。霞沢岳で殺されていた男は、やはり友部直紀だった。

彼は、三国油脂みくにという従業員約千百人の会社の総務課長だった。

家族は、妻と女の子が二人いる。

彼は、二十年あまり登山をしていた。都内と近郊に登山仲間が三、四人いて、たがいに誘い合つては、年に二、三回、おもに北アルプスへ登っていた。

今回の霞沢岳山行は、友部の提案で、三人に声を掛けたが、各人とも予定が入っていて、同行でしかなかった。

友部は、土曜、日曜を利用して、月、火、水と休暇を取っていた。妻には十二日中に帰宅すると告げて、家を出たのだった。十二日に山から帰り、翌日は休養を取って、木曜に出勤する計画だったらしい。

友部は、九日の午後、上高地を経由して徳本峠小屋へ入った。島々しましまから旧道を使って徳本峠へ抜ける人もいるが、彼はバスで上高地までやってきたことを、九日の夕食のとき、山小屋の主人に話

していた。

翌朝は六時半に、二食分の弁当をザックに入れて山小屋を発った。死後発見されたザックには一食分しか入っておらず、一食分の包み紙がまるめてポケットに突っ込んであったことから、登りの途中で食べたことが分かった。解剖検査では、午前八時ごろに朝食を摂ったことが判明していた。

友部は、前夜、単独で徳本峠小屋に泊まっていた。殺された朝も一人で山小屋を出発した。このことは山小屋の人がはっきりと覚えていた。

すると彼は、霞沢岳へ向かう途中で誰かに出会ったことになる。

若い女性の場合、単独行をよいことに、レイプを目的に襲いかかる不屈者がいても、そう不思議ではないが、四十四歳の男を襲って殺したのだ。目的は怨恨の線が濃厚となった。

たぶん、彼の山行計画を事前にキャッチしていた、山小屋から出てくるのを待ち伏せ、人目につかない場所にさしかかったところで凶行におよんだものだろう。

登山者の集中する穂高や槍だと、どこからか登山者が見えていそうだが、めったに登る人のいない霞沢岳だ。休むために腰を下ろしたり、食事を摂るスキを狙えば、犯人にとって殺害は容易だったはずである。友部の登山地が、犯人にとっては都合だったのだ。

彼は、ピッケル様の物で殴打を受けただけではなかった。倒れたあと犯人は、刃物で顔を十文字に切っている。

道原と伏見は、被害者の身辺を洗うために、東京へ出張した。

まず友部の山仲間の三人に会った。三人とも、

友部が殺されるほど恨まれていたなどと、想像したこともないと答えた。

三人の山仲間が、友部の死亡時にどこにいたかの確認も取った。怪しいとみられる人はいなかった。

友部のその他の友人にも当たったし、勤務先でも聞き込みを行なった。が、彼を殺したいほど恨んでいたという人間は浮上しなかった。

女性関係の線も洗った。同僚との付き合いで、女性のいる酒場などへ行くことはあったが、その店のホステスと深い関係になったという噂もなかった。社内の女性社員と、不倫の関係を持ったという噂もきかなかった。

四十代半ばで課長というのは、そう早い昇進ではないが、遅くもないという。

友部は、コツコツ型だった。二流の大学を出て、

すぐに三国油脂に入った。一時、営業部門にいたことはあるが、後半の十三、四年は管理部門を担当していた。

「敵をつくる男ではない」

というのが、上司や同僚の人物評だった。

昇進の歩度が標準的ということは、大きなミスを起こしていないという基準でもある。

彼の私生活にも目立つ特徴はなかった。

二十七歳で結婚した。大学の先輩の紹介で知り合った女性で、ほぼ二年間交際の後、結ばれたのだった。

二人の娘がいる。友部もそうだが、家族全員健康で、家庭内騒動が起きたこともないという評判だ。

住居は一戸建ての二階家で、いまもローンを払っている。

友部の趣味といえ、年二、三回の登山である。うまいとはいえないが、写真も趣味の一つとなっている。

道原と伏見は、これらのデータを集め、怪しい人間をきぐったが、友部の身辺からは疑いを持ちたくなるような人間は、まったく浮かばなかった。捜査本部では、友部を殺^やった犯人の目撃者さがしをした。登山者というのは、誰もが似た服装をしているから、山中で出会った人をはっきりと記憶している例は少ない。

徳本峠は人気のあるポイントだ。穂高の絶景と対面できるからだ。その付近で九月十日の午前中、霞沢岳方面からやってきた登山者を見掛けた人はいなかったか、あるいは霞沢岳へ登った人はいなかったかの捜査をした。が、これもから振りに終わった。

捜査本部では、犯人は男だろうと見当をつけている。腹や背中への殴打が強烈だからである。

それと、霞沢岳へ友部を尾行するか、彼の到着を待っていたのだ。かなり登山経験を積んでいないと、これはやれないだろうということになった。友部の山仲間、いずれも登山の熟達者だった。都合がつけば、三人とも彼と一緒に登った人たちである。

もしも友部に同行者がいたら、犯人は目的を遂げられなかっただろう。

これを考えると、犯人はかなり前に友部殺害を計画し、実行の機会を窺っていたようだ。

「人違いじゃないでしょうね」

捜査会議でそういった刑事がいる。

人違いで殴られ、顔を十文字に切られて死んだのだとしたら、友部は稀にみる不運な男である。